

かかってくださった方が多いため、どうしても発表内容に偏りがあったことは否定できません。にもかかわらず、すべてのセッションに出席して、丹念にOHPと予稿集を目で追っている学生（特に女性に多かったようです）が結構いたことはせめてもの救いでした。主査による閉会の挨拶の後、参加者は各人各様の思いを胸に帰途につきました。

今回でSSORも32歳を迎え、しかも発足以来ほぼ毎年のように開催されてきたことを考えると、当該夏季セミナーの歴史と重要性を感じずにはいられません。ただ、最近の傾向として、SSORが卒業論文や修士論文の発表会のような様相を呈し、毎年お決まりのパターンで進行されるといった批判があることも否めないようです。よく準備し、内容も吟味された発表を聞くことはまことに結構ですが、講習会やゼミの形式でORの基礎的勉強を行うと同時に最新のトピックスにもふれることができるよう、SSORの在り方について再考する時期にきているのかもしれませんが、ご承知の

ように、SSORはOR学会とは独立に運営されている任意団体ですが、わが国におけるOR研究の登竜門として長い間不動の地位を確立してきたことも事実です。そこで、40周年を迎えたOR学会の長期計画の枠組みにおいて、SSORへの支援を要請することでこの駄文を締めくくりたいと思います。広報関係だけでなく、SSOR開催に向けての経済的援助や講師の派遣などを通じて、今からまさにOR研究に携わろうとしている若い世代のために貢献する方法を学会として模索する必要があるのではないのでしょうか。むしろ、SSORの古き良き、そして自由な伝統を継承しながらというのが制約条件です。また、SSORに参加する若手研究者や学生も、与えられた環境に安住することなく、より好ましい方向へ進んでいけるよう、積極的に参画してゆく必要があると考えます。このような学生・若手研究者の交流の場であるSSORがますます盛り上がることを願ってやみません。次回は中京地区で開催されることが決まっています。

## 追悼文

### 井上洋一氏を悼む

本会フェローの井上洋一さんが去る9月5日逝去しました。私が井上さんと知り合いになったのは今から14、5年前だったと思います。毎月1日新宿副都心のレストラン・レダで開かれる新宿OR研究会に出席し出してからです。毎回にこやかに皆を迎え、名世話人ぶりを発揮しておられました。

「来月はちょっと入院しますので欠席いたします。」と昨年の秋の会合で、別れ際にわれわれに告げられました。しばらくして矢部先生と東京逡信病院にお見舞に行きますと、「食道の下のあたりをちょっと手術しました。」としごく元気でベッドの上

にすわってわれわれを迎えてくれました。「この調子なら意外に早く1、2カ月のうちにまた会合に出てこれそうですね。」と帰る道すがら2人で話合ったことを憶えています。しかしそれ以来結局一度も会合には出席しませんでした。

それからが大変でした。われわれは毎月の研究会の講師の手配に追われることになったのです。今まで講師の人選、手配は井上さんが例のスマイルと押しで手際よく処理されていたのです。

あらためて井上さんの名世話人ぶりをしのぶしいです。ご冥福をお祈り申し上げます。 小池 清